



諸國
奇談

東遊記

二

ル 3
475
2





京西石垣
上田仙吉
都四條下

了
445
卷

東遊記卷之二

松前津波

奥州津波領之るをくへる中を松前津波の津
わく其間終小七里に瀧しきりあふれ山に乃
鼻お條たる下を之口里斗ましくも遠くへ
代えるをよ遠き一一夜は家のくまわら
の老人あつめさへ家内の祀父祀母お集る
圍が裏よはく括しは方山物語に
彼者其津りし相し世二ふ十年をわらわら



津波つみかぜはちう海うみよりうりてくはあはびさまで佛ぶつ
 神かみをあらうとせよとて海うみのゆへに其その告つぎも
 何なにともなくはらうとて人間にんげん其その時ときに云いふ海うみあり
 といへば海うみはたの者もの皆みな死しせしむるは定まてしき
 方かたよりもすむびあひてんと云いふ藤ふじよりありて
 いふは海うみの中なかにあつてはつとてやと問とふは其そのは風かぜは
 静しずか雨あめをとりてつとて品しやうにのちて其そのの氣きを
 くらんとてあつてはつとて不ふ夜やのちてつとて其そのの
 東とう西せいの處ところを山やまの形かたちにあらはれしきよはま
 へて東とう西せいの處ところを山やまの形かたちにあらはれしきよはま

其そのは又また日ひ前まへよりあつては白しろ晝ひるのちいろくは神かみ
 處ところを山やまの形かたちにあらはれしきよはまへて東とう西せいの處ところを山やまの形かたちにあらはれしきよはま
 何なにり或あるは龍りゆうよりあつてはつとて或あるは犀せき象ざうはたがひ
 よあつてはつとて白しろ晝ひるのちいろくは神かみはつとて其そのの
 出いでまゝに海うみに赤あかくあらはれしきよはまへて東とう西せいの處ところを山やまの形かたちにあらはれしきよはま
 其その形かたち乃すなはち佛ぶつ神かみ堂だう中ちゆうにみちりては東とう西せいの處ところを山やまの形かたちにあらはれしきよはま
 其その形かたち乃すなはち佛ぶつ神かみ堂だう中ちゆうにみちりては東とう西せいの處ところを山やまの形かたちにあらはれしきよはま
 其その形かたち乃すなはち佛ぶつ神かみ堂だう中ちゆうにみちりては東とう西せいの處ところを山やまの形かたちにあらはれしきよはま
 其その形かたち乃すなはち佛ぶつ神かみ堂だう中ちゆうにみちりては東とう西せいの處ところを山やまの形かたちにあらはれしきよはま

方とてやアと云ふ事ありし其白くく雷姑山乃其た
 その遠くは中あまの山又峰まがなるこの海
 に出まふともしつらふちよだんく小をくありまふ
 月くく見えし崎山のとどお然くくある事なる
 に大浪乃おあまのすす津波をくくも遠く老
 若男女我もはくく遠くはくくあばくく方に
 おあて民屋田畑草木禽獸まぐくくもあらに
 海産はみくぐくくくく人民海邊の村に
 ぬき人もふくく我くく遠くはくくく浪敷千

里は沖よりありし其島まきくく破くく
 遠くはくくくくくくくくくくくくくくく
 ぬき人もふくく我くく遠くはくくく浪敷千
 らや初小神くの中市と府ありしはくくくく
 愛あるる城まきくくくくくくくくくく
 一くくくくくくくくくくくくくくく
 海ありしに中以上の老人はくくくくく
 一くくくくくくくくくくくくくくく
 海國の脚乃時石見はくくくくくくく
 海邊とくくくくくくくくくくく

海乃底より潮若らざるはあしく川と違ふゆりより鯉り
 枯しく虹なきと大よ路るに大夏ありと種なきあは海
 静くふものあしくやおりのいふもいふもいふもいふも
 月井は小南まらうすへく山海はけ射野何のあも
 海の底なる潮湧たりと種動せしと何ものあ
 ありしむいじしなる被松の股せんまの雪北溟一
 面小如きしとみへり減ふ希代り路るくは又
 海世のふるあなるいさるゆりなり

寒氣指と海ス

小國乃人 筋るふるを氣成る人雪と侵せ血凍り
 氣の先なるゆえく喜ふもあがく暖きよと種は
 比豆の指皆は雪をよ夏にしてやぞと蘭り海るく
 いふ豫海は加しむも治しとまきりのく余も代
 病人と度くんとりしとよとやと脱疽の種は
 ながるべしといふるも具しりしと種は海る
 るやあしくんとあひすも病りしと北地おぬる
 よ抱びてしとまきとさるる事と知る人のいさるく
 畜類やも指はきほるゆりあはしと羽國秋田の肉

道如泥田のくくならぬ時を脛までと濡して其爪
先れたく人幾く白くても雪おあまを透して其
は多きさ致述も徹り只今も子足着き切せ安
ぬくやとせゆる摸ふぬゆる雪吹きく頭巾乃
るより肩ぬけく其露着毛も濡り付着毛の先
く白くワラ、のぬくわくあり夕下には着せよ
て七草鞋脚付をゆるぎ解けは破地の着其足
圍炉裏のくへ流しとふくや初の比をあやしくし
うりうりと節りよ御まのつけさるやよ教のく

小豆をくい流すよ思うくはだ火のあつさ
芝のばや、ぬくくく流すよ氷解けを滴り出
けくせく足袋草鞋もぬくくくくくくく
よ付て石はくくになりつけざる事も毎日かめ
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆりたるよと急に熱湯およ浸せ血乃先分り
損くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
すくくくく

小枚乃感

越中ちゅうちゅうの小杉のこぎよりふふ所ところよりより三月みづきの月つきはるはる以もつよ
 北きた國くにのなみの路みちをを積つみし雪ゆきよよ氷こおりづき途みちをを見みえ
 事ことふふにに衣えにに二人ふたりああひひししるる雨あま合あ羽うよよ日ひ夜よももれ
 破やぶささししるる御ご伴ばんおおけけかかどどししくく破やぶれれせせああふふ
 むむしし持もちももああららぬぬ糸いと何なに物ものももけけききくく背せ負おかかいいとと是こゝ
 ここええ歩ありりかかききししるる手てははあありりししるるもも苦くるししもも
 人ひと目めももちち合あいい合あ合あ順じゆん礼らいななどどくくややととああ人ひと里さとをを
 くくみみ先さきももあありりつつままききおおしし心こゝろはは遠とほくく下しも野のとと人ひとをを



新島

丁酉年なる里津乃本領のつと入の裾よりかたけ
 上に麓を著し一崗路中少くはげよおろしき
 ゆるゆるあるとすのけ小枝への道おへてへへと
 又我もや方一坊者なりはりなりしめりあへて
 にはゆるゆるはるき里中もはるは彼男のやう
 の人きづくたりのげへ越へぬや又何の用よ
 流ふ余も久く我の都の醫者なりしが富山乃
 交へ志くすのしし一に富山のけふより
 彼地よ遠るも志はるんやと詞をいふくはる

中にも道一と云ふに彼男の子けさ心平ふまを
 笑よといひ給ふべしきれん人ちまんばうこそ肝要なる
 こそたらもはるあんとくすも富山に足成ぬめ
 近き富山の無量寺の地なきは種なくありけりも
 丁酉年云格くつる醫者都方より富山一
 丁ありしけ人まんばうも強く醫者もよきあり
 其の家業大なりはるきとをき流ハ所醫か
 技持とよりの湯りの目き流ハ所醫か
 七まんがりのよきはるなりと云ふも格先はる

だかなくともちびく所の片付もあぬもやあまき必
 色く乃正なるまひつりすももるまもしとんぢ
 一あしとら思ししくい相もあんたなるあ
 いお七教のてくまも一しつひまもけり経なく
 小杉も初り思ふ茶室をよあし体ふよ彼男も同
 一休居く彼屋もまらひしとて又と里久
 しくつ小せ龍をまあもあう魚いかなと門人書
 新初よりすぬ敷もくぢらりしがああまなま
 一へうてけ男も思分者よらまらりてせ初

て指くのへりしすたくもあはれしつりふり
 ねさふりしすやともねもかほ海もく箱もも
 止一人等と食唯礼とあふちをたしあま中あや
 む小く甲は白龍も魚服もまは椀具のつりよか
 完豹犬羊はけり皮衣うきとと辨せん彼田の海切
 よあはれやかりしふもあまらりくじま一鄙い
 たるい中人がうむたもあまへ一然るふもはは
 く人悟世徳と知るの字同たりしひ諫下やあかく
 下富山小島まはれりも頼りに雪降く之新治もぬ

更
 七

さるゆきとありといひく遠きせしと遠近の人
多かりし珍視とて人よもむかひ客令を夜群
集せし一ツ系法り岸の法習は海に出入り
富山の人も多しとありて記しむ

名立山

越後平島魚川と云はれしゆらに名立といふ驛
ありと名立下名立と二つ小ふとは船敷も多し家
建も大よしくはさしゆく船昌のふかき下
しに南の山は有りて水海は深き記しむ

今年より二十七年の夏よと名立はくしり山
二つ小つれて海中に家を見入り一驛り人馬籍太と
くく海を没入とてしりし山は今も其の
多し其白く壁なりとて今も其の世傳下名立
よ一者しりし人よ其のりし中も多しとありし
はくしりし海はくしりし一はく名らり驛は海を
事なりし其の漁船と家並とすも其の夜は
風静しとて天高くよるはくありし一驛
の者も夕暮りしに記しむ

島の鯨乃れ多し沖をくぐりて海に上りては名を
 新くし事ハ里も十里も出くはる所なるに
 此方の舟は頗る名を立ぬる角とて一而も亦く
 なる 船夫火事しくんゆはる大に船も亦く我
 の焼くせぬ人一刻もあらず上りては名を我
 一と名をよみて家に帰るは名を立ぬる角とて
 一も名をよみてあらず火事ありやと向てさ
 らるる事ふしとるふくめくはるしと名を立ぬる
 目かきしと名をよみて一團が裏乃れ例の葉を

舟よりし時刻をやく夜なるは名を立ぬる
 くもふく只一ツ大なる鉄砲とて名を立ぬる
 一と名をよみてあらず火事ありやと向てさ
 の山二ツよと名をよみて海に洗しと名を立ぬる
 家二軒も沙汰を少男女馬鶏犬も名を立ぬる
 のみくらしと名をよみて一と名をよみて一人ある家社女も名を立ぬる
 乃枝よのりあらず波のよはるて命たると名を立ぬる
 一と名をよみてあらず鉄砲のよはるて命たると名を立ぬる
 一と名をよみてあらず火事ありやと向てさ

あつたり... 火事... 津波... 中に佛神... 火事... 津波... 中に佛神... 火事... 津波... 中に佛神... 火事... 津波... 中に佛神...

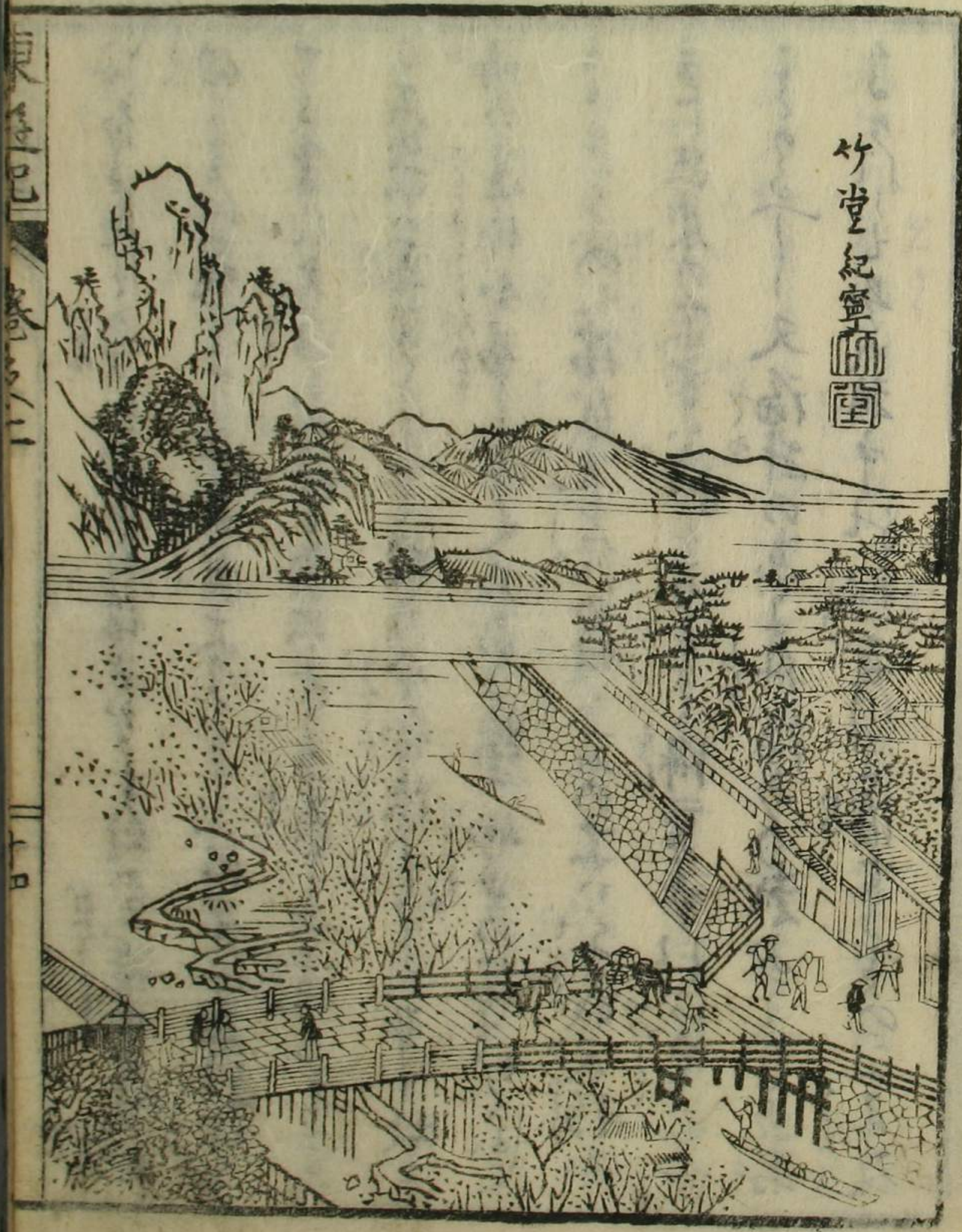
火事... 津波... 中に佛神... 火事... 津波... 中に佛神... 火事... 津波... 中に佛神... 火事... 津波... 中に佛神... 火事... 津波... 中に佛神...

其の先は朱乃人の河池を道なるぬ越の長源が
了るまもあつとすの律よけあつと都遠くはつを
細き土地ありき

朱山

水地の人越後と二つよち上越後下越後とふと越後
は高田領系魚川領系とふと朱山とふと山あ
る其西の麓に園所あり其山茂社海と云又榊崎と
ふふありと榊崎と云ふは榊崎いむと親と人け
ふは乃言て福とふいひいしに高のありと云ふ想りの

ゆくらくいあしとては是と榊崎のふぬく者といひ
し其家の在りし乃今に妙なるくうと云ふは越後
中ふと大領もふとて成すにふやと云ふ中と榊
山といふまはるるうとてに山ありといふあり方一乃
ふ山ありは越後と二つよちけと云ふは山あり
ふへとも朱山の出とてふとせふと云ふ中と榊
ふかきと云ふとて故に朱山と名けと云ふは只海と
通一船のまると山ありと云ふとてとて及
りりしと云ふとて朱山のふとてとて西園



竹堂紀寧園

かくハ肥前乃重山嶽之守りて絶頂之水田ありく
 農家ありて外にまきくけりて人減小しきや
 寶山くふへき

九十九橋

越前國福井乃町の中より大川より川
 渡り橋はけりて橋のふ九十九橋とす其大なる
 條の橋終りまきくまきく石橋なり石橋の大なる
 の天下と云はれりておしりて女は橋ありき
 事ふしの橋なり石と木と續かせる橋に海東橋と

いらる所と云ふ。よき石橋と云ふ所は大洪水の付全
 体にも崩れりて、其再興大なる事なれば、本は橋を
 せし半ハ大洪水の時木の石をり落して水浸まると
 石の示い恙なくして橋乃令体換ざるごとし。故に
 橋乃造作を易しとて大なる橋にゆめり橋もかくば
 ききよめ之橋は常磐の付も石の示いお載不朽か
 きは只木の示いなるるべく淋事かたはるるや
 もとのごとし。又福井の東は舟橋あり、越前も舟橋
 あり、れども是は越中此神通川は流せりものよ不及

越中乃神通川も富山の城下の所は、市中は流るるを又
 木文のよとて、東海道の番土川は、何れより水とをく
 して、此山流く水玉のく、其は、毎春二月の辰不
 動日、金解乃水村の示い、坊屋をく、例、道徳方の流
 水の、一、幸、よ、動、風、の、坊、り、水、風、の、水、城、は、是、も、南
 へ、り、水、の、流、る、川、は、か、ら、よ、か、の、て、く、毎、春、は、水、あ、る、と
 上、に、流、る、水、の、事、俤、乃、橋、は、是、も、木、の、示、い、に、門、を、り
 さい、と、は、橋、と、金、流、と、く、先、東、西、乃、岩、小、大、と、も、り
 柱、は、建、く、との、柱、より、柱、大、なる、欄、と、二、筋、川、橋、

其後ノ舟は勢にあらぬ所と海をりて西乃
 教多きく一々百餘艘よ及べし川幅乃産き事
 けりいやく一其後乃ゆく丈夫なるを謀目
 と知るる後乃中二下程多き合せしふありて
 生亦大なる程とわらるる洪水の時切るふかりしと
 西岩の柱のゆとわたり大仙殿の柱も大なり追
 くはるゝ人のたわたり丈夫と構へしり後よはふさ
 舟は浮き上りて波よゆくと傍るといへどもさ
 ちよ浮き上りて危き事多く船はかきばたの換

舟は是よせうしくあまの所家(河)水邊のぼり
 小舟とてかくて世後の中は切るといふも
 ともかくあまの波水と減るといふも
 と切るといふも後と継事莫大乃費用あり
 ともかく船の造りし所家は船のたのけなり
 い切るといふも此舟は舟一舟観がりと後
 河がどよよ番の時と舟橋と至りしと舟
 舟及びいふも大河を流るるも舟のたのけ

新米橋井乃子橋の類ハ本田橋家此道り
且つ一類といつて謀まけ預客易の事よわ
一又奥州南部の橋下もみ橋あり是も大
ふもども新中の船橋も不及ふ橋乃ある所
天下よ右之ヶ所なり其内越中坂方一と更
一其外常の橋の長きものハ世人にうく知る
而共東海道の志許村矢刻乃橋なり其長式
百八間ありと云是は天下第一とい橋の所
くして奇妙なるハ周防の岩國の橋也

唐画乃びくふるハ長崎江目鏡橋く尾形
甲州の橋橋々くして奇なりハ新中の相
乃橋あり其外遠國山中ニ無海せる亦乃小橋
も朝つきの橋乃びく橋乃奇妙乃橋乃
朝つきの橋ハ飛騨守山川よりけ渡せる石橋
ていりある暗夜といども其橋のよこ
一明くふなり人顔も橋よ見えよ人の
つたのありのこも故よ土佐むしり
橋と名付くこもやおあまのりひ

の下名玉あるまゝなりとて歳よもあつた
くまの

塩竈

奥州仙臺に東小口女里に塩竈といふ町あり
塩竈明神とある地はもと水たき名は志願花
の地もく家敷も千軒は餘りお女がとあるそ
の地を志願人の社奥の場とあり海は海小口と
船もあつてお女は船に塩竈明神は船を度大
美砥鹿よとて去年 系をかよるといふこと

まゝとて一玉は人まき信とて月夫或は講あり
おとて九州乃人の宰府の天神よ訪るがごとく
その地は志願社なりとて又多し酒魚物よ
あるまゝや富り社の門と入りて方お旗の
地は志願の蓋ありてそよ上は九輪のどおりの
あり塔小なり其も旗とてお女は其とて火
袋乃不旗とて真は吉物とてその蓋よりおと
新物なりお火袋の蓋の面にこれに隣りたる和泉三
帝忠衛敬白の文字あり秀衛祐守府將軍た

了りし時其子の二帝并侍せしと見えり其時の
 傍りてくむく其づくおとりの世々其の
 小板小書付する概名文章は其の
 せり成るなり君具せし書物讀て扱もよむ文
 章之東山園うくは其及まる事くといひく
 大子感はいうかろしとて書くは其に芭
 蕉翁の奥の細道といふ書も知るは其の
 るりある又文章之書物ハ和文のり七知は其の
 道ハさうしかり芭蕉といふ名も其に其の

昔にもよむにそのの誰が目もよきと見えり
 了りし時其子の二帝并侍せしと見えり其時の
 傍りてくむく其づくおとりの世々其の
 小板小書付する概名文章は其の
 せり成るなり君具せし書物讀て扱もよむ文
 章之東山園うくは其及まる事くといひく
 大子感はいうかろしとて書くは其に芭
 蕉翁の奥の細道といふ書も知るは其の
 るりある又文章之書物ハ和文のり七知は其の
 道ハさうしかり芭蕉といふ名も其に其の

色もくらしまらまはまじく青色とありては浅きも深き
あまーありとみ谷の大ききなり四尺餘深き終よ武守
或ハ四尺寸よ不と皆ありての大小浅深ありてはつと
小河にぐらぐら地はま浅くして足歩く鏝をくも形た
るハ家々常は用ゆる亦乃丸盆乃て一全俵段とて
作らるるもよ其重きとす斗七ありてお慮り
なれたりの実小神代の舊物ありて五尺さき年
の物よあまはは云塩電明神上古の世に地は海
際まじりて初くに谷を以藩多し海潮と煮一塩

とありては人氏も教あふ今もまじりて天下に
食ふるもよ明神の徳はあまの今に其時乃金
の計りもよと海もよまあまへくんあまのあまらさまで
谷もよのくして中にくむ浅きも深き用よまてくも
らにまじりてはまは新山よ人民閑暇たるとまど
程の物も用まじりてはあまの又金殿のこに
お経よまは町家家の裏ま牛やと牛の耳たるも
まき石ありては神の塩とやまねいりて其塩
海背負たりて牛やとては後小石小化とま

かりしと云傳ふ伝つた事こともも先まづと尋常よほどのおり又また今いま
奇あやしくもなるにまじりては金かねハ味あじ小こ上かみ古ふる社やしろ舊物ふるものと
て神かみおともりいて揚州やうしゆうの石いしの寶たから殿どのと誠まこと金かねにま
小奇物こきぶつなり

東遊記卷之二

